

継続的な実践を支える文脈：趣味のアクセサリー制作を例に

What Supports Continuous Practices : on Accessory Making for Hobby

青山 征彦
Masahiko Aoyama

成城大学
Seijo University
aoyama@seijo.ac.jp

要約

趣味でアクセサリーを制作している女性へのインタビューをもとに、制作という実践が、どのようなリソースに支えられて可能になっているかを検討した。その結果、友人に頼まれたり、参加予定のイベントにあわせたアクセサリーを制作したりするなど、趣味そのものではない、他の活動の文脈が、継続的な制作を支えていることが示唆された。

Keywords — Learning, Hobby, Subculture, Accessory Making

1. 問題と目的

本発表では、近年、女性のあいだで盛んになっているレジン（光硬化樹脂）などを用いて、アクセサリーを制作する趣味に注目し、継続的なアクセサリーの制作が、どのような文脈に支えられているのかを検討する。

アクセサリーの制作は、個人で短期間にできる趣味であるため、手軽に参入できる反面、中断も容易である。にもかかわらず、継続的に実践しているケースが、これまでの調査からも散見されている。そこで、本発表では、アクセサリーを継続的に制作している事例を検討することで、継続することを下支えしている要因について検討する。

このような検討を通じて、サブカルチャーにおける学びに注目した研究（松浦・岡部（2014）など）に資する知見を提供するとともに、継続的に学び、実践する環境について考察するのが本発表の目的である。

2. 方法

被調査者 アクセサリーの制作を趣味としている、以下の大学生（当時）にインタビュー調査を行った。調査期間は、2016年12月から2018年3月であった。Nさんは、アクセサリーを作るが、レジンあまり用いない。他の3名は、レジンを多用してアクセサリーを制作している。

Oさん 埼玉県の私立大学生 4年

Eさん 東京都の私立大学生 3年

Sさん 東京都の私立大学生 2年

Nさん 東京都の私立大学生 3年

調査内容 アクセサリー制作を始めたきっかけ、アクセサリーを制作する目的などについて、半構造化面接を行った。なお、インタビューの内容の一部は、昨年の認知科学会で発表している。

3. 結果

本発表では、主にアクセサリーを制作するきっかけについて報告する。きっかけは、内発的というよりは外発的であるようで、人に頼まれて制作したり、参加するイベントにあわせて制作したりすることが多いようである。

(a) 友人に頼まれる

アクセサリーを自作すると、注目され、私にも作って、と頼まれることが多いようである。Oさんは、自作のアクセサリーを身に着けることはほとんどないと語っているが、サークルの先輩にプレゼントするなど、友人のために作るのは厭わない。

O：頼まれることはちょこちょこあるんで、それ用で作るのはもちろんあげたりとかしますね。

N：たまに作って欲しいって言われて、どんな感じかイメージ伝えてもらって、なんかそれっぽいパーツいくつか集めて作ってあげたりとかは、誕生日とかにあげたりとかしてました。

(b) イベントのため（自分用）

自分では着けないOさんも、サークルの引退ライブでは、アニメでよく見るアクセサリーを自作し、身に着けた。Nさん、Sさんは、ジャニーズ（NEWS）や、ネットで活動するタレント（以下、Xとする）のライ

ブ、イベントにあわせてアクセサリーを制作すると語っている。

O：(学祭で、引退だから、ちょっと着飾ってみようかしらって作ったのが自分の物を自分で作るはじめ?) はじめ、ですね。(あー、だからよっぽど何か自分が着飾るっていう趣旨ではないんだ。) ないですね。そういう意識全く持ってないですね。

N：わりとなんかライブの度に作ろうって思ってた、そのXのイベントがある度に新しいアクセサリは今でも作ってます。

S：ジャンプのNEWSが好きで。今回のテーマがねじとかいろいろ(略) 買うのもいいけど、ほんとテーマに沿ったものをつくりたいなと。

(c) 気に入ったデザイン

気に入ったデザインのアクセサリーを見つけると、そのデザインに似せて制作するという発言も見られた。

Nさんは、委託販売のお店に足を運び、作品を見るのが好きだが、自分で作った方が安いと考えて、買わずに自作することが多い。Sさんも同様で、千代紙の折り鶴のイヤリングは、自分で作ればずっと安く制作できると考え、鶴を折ったところだ、と語っていた。

N：ハンズビーの上のところに委託販売のところがあって、そこでいろいろ見ながら、でその帰りにヒカリエ(注 別の店の誤り)の方に貴和(製作所)があるので、そのまんまその足でヒカリエに行ってパーツ買いに行って、で帰って作るみたいなの。

S：(折り鶴のイヤリングについて) それ1500円かけちゃうのかな。

(d) 販売

Eさんは、大学の手芸サークルに入っていて、学園祭で販売するために、アクセサリーを作っていた。その売れ残りなどを、ハンドメイド作品の販売サイトであるminneで販売していた。また、Nさんも、友人を中心に販売していたことがある。

しかし、どちらも長続きしていない。販売用の作品はクオリティにこだわらざるをえず、時間も手間もかかるため、長続きさせるのは難しいようである。

E：なんか、あの、私文化祭が終わって、いくつか売れ残ったのをミンネっていう手芸サイトにだして、それで売ってたんですね。で、ミンネにもお気に入りみたいなのあるんですけど、してくれる人とかがいて、たまに買ってくれる人がいたんで、それが嬉しくてめっちゃ作ってましたね。

E：何か今年もできれば何かまた作って、家の近くとかでやってるフリーマーケットにでも出そうかなと思ってたんですけど、忙しいって思っているうちにやんなくなってみたいな。だからミンネとか、ミンネに出すのも途中でやめちゃったし、それからデザフェスも行かなくなったしって。

N：友達の間だけでは、たまにしてて。そのtwitterでハンドメイドのアカウントを作って、その周りの友達間その友達の友達とかくらいまでは販売とかはしてました。(略) ちょっとだけ。ほんとちょっとの期間なんですけど。

N：やっぱ友達にあげるとか、やっぱこう販売するってなると、やっぱこうちゃんと丁寧に時間かけて作りたくなって思ってるんで、それでちょっと流れてる部分もあります。

4. 考察

調査の結果からは、アクセサリー制作は、内的な動機づけというよりは、他の活動の文脈のような外的なきっかけでなされていると考えられる。また、パーツの入手や、作品の流通を支えるパーツショップ、ミンネのようなネット販売、ハンドクラフト専門的など、社会的な下支えがあることも、アクセサリー制作の継続を容易にしていることが、見て取れた。

制作するきっかけには、いくつかの理由が挙げられたが、特に、何かのイベントに向けて制作している場合、制作はイベントに向けてなされるため、定期的に制作することになるようである。実際に、制作の頻度は、ジャンプのファンであるSさん、ネットで活動するタレントのファンであるNさんは、他の2人よりも多いという印象を受ける。アクセサリーを制作するきっかけが、他の趣味によって与えられていることによって、長続きしていると考えられる。

また、市販品にはないものを志向していることも共通していた。こうした志向も、趣味の実践を長続きさ

せているように思われる。Nさんは、タレントのインシヤルを加えたアクセサリを自作しているが、これは「かぶらないため」である。Sさんは、市販品に一手間かけ、自分の好みにしようとしていると思われる。

N：でもXの界限は、ジャニーズより本当にキャパが全然狭いじゃないですか。なんで、結構服装とか見えるんですよ。(略) でなんかかぶったら、なんか、あれさっきも来てなかった？みたいな印象が同じになっちゃうじゃないですか、その違う子と。それでごっちゃになられたら悲しいんで。

S：新しいバックとか買ったりすると、これ何つけようかなと考えちゃうじゃないですか。(略) 黒いリュック買って、これ黒だけじゃ色さびしいから、なんかつける、と。

このように、アクセサリ制作という趣味は、さまざまな要因に影響を受けながら、継続したり、中断したりしている。大会発表までに、さらにインタビューを追加しながら、こうした継続的なアクセサリ制作を支える文脈について、明らかにしていきたい。

5. 参考文献

- [1] 松浦李恵・岡部大介 (2014). モノをつくることを通した主体の可視化：コスプレファンダムのフィールドワークを通して. 『認知科学』, 21,1, pp.141-153.